

【タイトル】

自由のための読書——読む力と読みやすさの謎に迫る

【授業概要】

この授業では、印刷・出版に関わる歴史と技術を読むことにまつわる広い文脈の中に位置づけ、表現力を高め読む力を身につける必要性について考える材料を示す。

1 人間にとって読むことの意味、および印刷による出版物の増加によってもたらされた読む条件の変化について

1.1 読む楽しみ

吉田兼好は『徒然草』の中で「ひとり、^{ともしび}燈のもとに^{ふみ}文をひろげて、見ぬ世の人を友とする」楽しみについて述べている（第十三段）。書物を紐解けば、遠い過去の（あるいは遠く離れた土地の）人の作品にも親しく接することができる。しかしそれには読む力が必要になる。異質なものの存在を読みとる力によってはじめて「見ぬ世の人」が現れるとも言える。兼好はこのような嗜みを帝王学の一部と考えたのだ。

1.2 読むことの難しさ

言葉で伝えるほどの意味内容は言葉なしに直感的に伝えることが困難であるばかりではなく、人が伝えようとする意味内容は声を聞き文字を追うだけでそのまま直ちに聞き手や読み手の頭の中に入り込むというものでもない。それゆえ人間の成長の過程で表現力の洗練や聞く力・読む力の向上のために多くの努力が傾けられてきたし、それはまた広い意味での人文学が目指してきたことでもあった。

1.3 印刷による出版物の増加と読み手の増加

洋の東西を問わず、印刷による出版物の増加とともに読むことは少数の人々が独占する技能から多くの人々に共有されるリテラシーへと拡張し、書くことと読むことが多くの人々によって出版物を意識しながら行われるようになった。人々の読む力が向上すれば、今ここにある価値観や権威を批判する潜在力となる。権力者たちは特定の書物の出版を禁止したり逆に奨励したりして書物の流通を制限しようとするが、一方で15～16世紀のヴェネチアのように自由な出版によって繁栄する都市もあった。

2 書物の読みやすさと書物を読む力の関係について

2.1 様々な読みやすさ、様々な表現

読みやすい印刷物をつくるために活版印刷の時代からいろいろな工夫が積み重ねられてきた。一つは書物本文の読みやすさに関するものであり、本文と読み手の間に読む流れを妨げるものは置かないという消極的な作業原則がしばしば主張されてきた。読み手の読む力を信頼した上での原則だろう。逆に、読む流れを意図的に妨げる組み方もあるということだろうか。これに対して交通標識や商品広告などでは、たとえば遠くからでも識別しやすい書体と文字サイズ、目を引きつけるという意味で誘導性の高いデザインなどが積極的に求められる。またこれとは別に、読む流れを妨げない本文の組み方に敢えて対抗するような特別な組み方をすることで文学作品としての表現力を高めようとする実験的組版の試み（マラルメの詩作 *Un coup de des ...* の組み方など）もある。

2.2 相互に影響し合う表現力と読む力

こうした読みやすさの制御とは結局“書く”側の表現力の問題で、読み手の主体的な読む力の向上とは別のものだ。読む力がなければどんな表現も十分には伝わらない。また読む力は読み手の数だけ多様な読みを生み出す遠心力をもちうるが、読みやすさの方にしてみても本来は多彩な読み手に応じた調節可能性を含むべきものなのだ（家辺『デジタルテキストの技法』）。このように表現の伝達可能性は書く側の表現力と読む側の力量の双方から制約を受けるが、視点を変えれば書物の読みやすさを含む表現力の洗練の問題はそれだけで技術的に自己完結するわけではなく、読み手の読む力との間で相互に影響し合う関係にあるということになる。